

一般社団法人全国日本学士会沖縄支部

創立30周年記念シンポジウム

「これからの沖縄の

持続可能な発展を目指して」

開催日時：令和5年11月12日（日）13時~17時30分

開催場所：パシフィックホテル沖縄

主 催

一般社団法人全国日本学士会

一般社団法人全国日本学士会沖縄支部

後 援

沖縄メディカルグループ、琉球大学

沖縄国際大学、沖縄大学、名桜大学

【企画の趣旨】

2020年初頭から始まった新型コロナ（COVID-19）の世界的大流行（パンデミック）は人々の生活に深刻な影響を与えてきました。ここ沖縄でも、本土から遠く離れた離島県ゆえの多くの困難を抱えてきました。とりわけ、亜熱帯・島嶼という豊かな自然環境のもとでの観光立県を標榜してきた沖縄県にとって、いわば基盤産業ともいべき観光産業へのダメージは深刻なものとなっています。加えて、3年以上に及ぶ厳しい行動制限は島嶼社会生活、独特の精神文化にも大きな影響を及ぼしてきました。

そのコロナ感染症が、季節性インフルエンザと同等の5類感染症へと分類分けされた今、私たちはコロナ後の新たな生活・社会をどのように取り戻していくかが問われているものと思います。

全国日本学士会は終戦直後の疲弊、混乱したわが国にあって、学術、社会、文化の新生・再生を目指して活動してきた歴史ある社団法人であります。その沖縄支部が平成5年10月に設立され、30周年を迎えております。これを記念して「これからの沖縄の持続可能な発展を目指して」と題して記念シンポジウムを開催する運びとなりました。

今なお、多くの米軍施設を抱え、かつ近年の国際情勢の緊迫化による国際安保の課題が増しつつある沖縄、加えて本土復帰から50年を経て進む本土化のなかで沖縄独自の社会・文化が失われつつある沖縄にあって、コロナ後の持続可能な沖縄発展の道筋を共に考える機会になればと期待する次第です。

令和5年11月12日

一般社団法人全国日本学士会
理事・沖縄支部長 佐藤良也

一般社団法人全国日本学士会沖縄支部
創立30周年記念シンポジウム

「これからの沖縄の持続可能な発展を目指して」

開催日時：令和5年11月12日（日）13時～17時30分

開催場所：パシフィックホテル沖縄（〒900-0036 那覇市西3丁目6-1）

※参加自由（無料）

I 主催者挨拶（13時～13時10分）

琉球大学名誉教授・全国日本学士会沖縄支部長 佐藤良也

II 講演（13時10分～17時00分）

《コーディネーター：京都大学名誉教授、全国日本学士会常務理事 田中克》

講演1（13時10分～14時00分）

「沖縄の持続可能な発展の方向性を考える：時代の変化を見すえて」

琉球大学学長 西田 睦

講演2（14時00分～14時50分）

「沖縄経済の変容と展望 - 比較優位の視点から -」

前沖縄県副知事、沖縄国際大学名誉教授 富川盛武

（休憩）

講演3（15時00分～15時50分）

「沖縄の風土に根ざした心理臨床の可能性」

沖縄国際大学総合文化学部教授 片本恵利

講演4（15時50分～16時40分）

「沖縄県の健康長寿復興を見据えた医学研究と社会実装の展開」

琉球大学大学院医学研究科教授 益崎裕章

III 総合討論（16時50分～17時30分）

主催：一般社団法人全国日本学士会、一般社団法人全国日本学士会沖縄支部

後援：沖縄メディカルグループ、琉球大学、沖縄国際大学、沖縄大学、名桜大学

問合せ先：一般社団法人全国日本学士会事務局

Tel：075(724)6500 Fax：075(722)3002 e-mail：gakusi@poppy.ocn.ne.jp

講演者等

「プロフィール」

「講演要旨」

【趣旨説明】

佐藤良也氏：琉球大学名誉教授、NPO 法人沖縄県食育協会理事長
一般社団法人全国日本学士会理事・沖縄支部長

【コーディネーター】

田中克氏：京都大学名誉教授、舞根森里海研究所所長
一般社団法人全国日本学士会常務理事

【講演1】

西田睦氏：琉球大学学長

【講演2】

富川盛武氏：前沖縄県副知事、沖縄国際大学名誉教授

【講演3】

片本恵利氏：沖縄国際大学総合文化学部教授

【講演4】

益崎裕章氏：琉球大学大学院医学研究科教授

コーディネーター

田 中 克 氏

京都大学名誉教授、舞根森里海研究所所長

一般社団法人全国日本学士会常務理事

【プロフィール】

1943年滋賀県大津市生まれ。1971年京都大学農学研究科博士課程修了。水産庁西海区水産研究所や京都大学農学研究科における稚魚の生活史研究を通じて、森と海の不可分のつながりに気付く。森から海までの多様なつながりの再生に関する統合学「森里海連環学」を2003年に提唱し、先行する社会運動「森は海の恋人」との協働を進める。森と海をつなぐ干潟や湿地などの“あいだ”の再生を有明海と三陸沿岸域を中心に取り組む。2011年5月に開始した震災復興「気仙沼舞根湾調査」を継続実施中。2012年より、幸せの原点を探るシーカヤックにより日本の沿岸漁村をめぐる「海遍路」に参加。2021年には、“里”（人の営み）のありようを求める、「森里海を結ぶフォーラム」を立ち上げ、代表を務める。著書に『森里海連環学への道』（旬報社、2008）、『いのち輝く有明海を一分断・対立を超えて協働の未来選択へ』（花乱社、2019年）、『いのちの循環「森里海」の現場から－未来世代へのメッセージ72』（花乱社、2022年）など。

西 田 睦 氏

琉球大学学長

【プロフィール】

京都市生まれ。京都大学農学部卒業。同大学大学院農学研究科博士課程等を経て、琉球大学理学部助手に着任し、リュウキュウアユなど琉球列島固有生物の集団遺伝学的研究・保全遺伝学的研究に従事。続いて、カリフォルニア大学バークレー校分子細胞生物学科客員研究員、福井県立大学生物資源学部助教授、東京大学海洋研究所教授、同所長などを務めるなかで、大規模な分子系統学的・分子集団遺伝学的解析による魚類の多様性進化研究を推進。東京大学名誉教授。その後、琉球大学理事・副学長を経て現職。「地域とともに未来社会をデザインする大学」「アジア太平洋地域の卓越した教育研究拠点となる大学」を目指して、琉球大学の経営・運営および改革に注力している。

おもな受賞に、生態学琵琶湖賞、日本水産学会進歩賞、日本進化学会賞、木村資生記念学術賞など。編著書・共著書・監訳書には、「魚類の自然史—水中の進化学」「琉球列島の陸水生物」「生態系へのまなざし」「保全遺伝学入門」「生と死の自然史：進化を統べる酸素」「海洋の生命史」「生物系統地理学」「ダーウィンフィッシュ」などがある。

【講演要旨】

講演1 「沖縄の持続可能な発展の方向性を考える：時代の変化を見すえて」

本講演では、これからの沖縄の持続可能な発展に必要なことを、いくつかのケーススタディの例を挙げながら、大きな視点から考えてみたい。

まず、今がどういう時代なのかを人類史的・歴史的に見てみる。その中で、日本、アジア、世界の人口の推移を踏まえれば、大量生産・大量消費・大量廃棄の時代（日本で言えば高度経済成長モデルでやってきた時代）は終焉を迎えていることは明らかであり、新たな時代を切り拓く発想が必要であることを確認する。つぎに、地球の健康状態を測るプラネタリーバウンダリー（地球の限界）という見方から分かることを基礎にすべきこと、そして地球、自然資源の有限性が明確になった時代にふさわしい「成熟社会」へ転換するのが21世紀だという理解が必要であることを論じる。さらに、沖縄の持続可能な発展への要諦として、①生産性の向上、②ウェルビーイングの向上、③人材育成の3点を掲げ、琉球大学での取組みの具体例などにも触れながら、沖縄の持続可能な発展の方向性について考えてみたい。

富川盛武氏

前沖縄県副知事、沖縄国際大学名誉教授、博士(経済学)

【プロフィール】

- 1974年 明治大学大学院修士課程修了
- 1985年 沖縄国際大学 教授
- 1990年 ハワイ大学 客員研究員
- 2001年 明治大学より博士号学位(経済学)取得
- 2008年4月-2012年3月 沖縄国際大学 理事長・学長
- 2017年3月-2021年3月 沖縄県副知事
- 2021年6月より那覇空港ビルディング(株) 会長
- 2021年6月より沖印友好協会会長

【講演要旨】

講演2 「沖縄経済の変容と展望ー比較優位の視点からー」

1. 沖縄の経済パフォーマンス

日銀短観、地価上昇率、ホテル等の大型投資等のマクロ指標が活況を呈している。コロナ前の日銀短観は全国を凌駕してきた。その後低下したものの、回復、発展でも全国を上回っている。最近のNIACの調査では2023年の経済成長率が10.5%と見通されている。

業況判断D.I.の全国(全規模・全産業)との比較

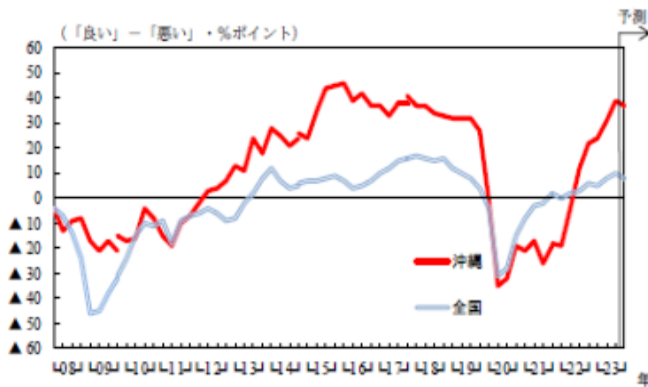
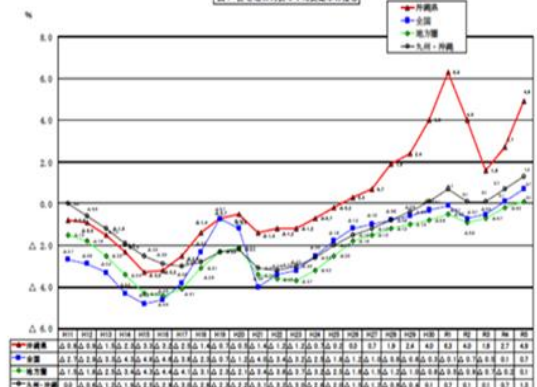


図1 国各地の対前年増減率の推移



人口減少社会の到来等我が国を取り巻く社会経済情勢が変化中、沖縄はアジア・太平洋地域への玄関口として大きな潜在力を秘めており、日本に広がるフロンティアの一つとなっている。沖縄の持つ潜在力を存分に引き出すことが、日本再生の原動力にもなり得るものと考えられる。(沖縄振興基本方針平成24年5月11日内閣総理大臣決定)

政府は沖縄を「フロンティア」といって、位置づけ、期待している。官邸は沖縄の目指す姿とし

て、「最近では、東アジアの中心に位置する地理的特性や全国一高い出生率など、沖縄の優位性・潜在力に注目が集まっており、沖縄は、これらの優位性・潜在力を生かして日本経済活性化のフロンランナーとなることを目指している。」と示している。これは今まで劣位にあった沖縄経済の変容つまり「パラダイムシフト」である。

2. マーケットが認める沖縄

基地の返還跡地には大型商業施設、高級ホテル等が立地して、活況を呈している。まちづくりが成功している事例はほとんどが基地跡地である。那覇市の新都心、北谷町の美浜、基地中城村の大型所PINGセンターが立地するライカム等である。米軍基地は経済の視点から見ると、発展可能性をフリーズしてきたと解せる。沖縄を取り巻く、経済環境の変化によって、その融解が大きく期待されている。

沖縄の地価は上昇し、新たなホテルの建設も進んでいる。これはマーケットが沖縄を認めている証左である。

3. 沖縄の比較優位

市場原理ではビジネスの「比較優位」があるかどうかで成長・発展が決まる。沖縄はマクロ的比較優位として、以下のことを有している。

・東アジアの中心に位置する

沖縄は「アジアの橋頭堡」として、取り込み・中継地として、沖縄は無論、日本全体、アジア諸国の発展に寄与することができる。コロナ禍で、アジアのダイナミズムが全壊してわけではなく、収束すれば、各国の経済構造の変化はあるにせよ、アジアの発展は続くものと考えられる。

・歴史、文化、風土によって人を引き付ける「ソフトパワー」を有している。

人々を惹きつける魅力（ソフトパワー）を秘めており、その可能性が今市場でも評価されるようになってきている。日本を含めた先進国が更に発展するためには健康・長寿、安全・安心、快適・環境、高い教育水準といった高次元のニーズへの対応が必要であり、それが先進国を更に発展させる力となる。豊かな自然・歴史・文化を有する沖縄はこのニーズに対応できる産業発展のポテンシャルを有している。

・Well Being(住みよさ、暮らしよさ、快適さ等)がある。

沖縄県は魅力度、住みやすさのランキングで上位に位置する。沖縄には歴史、風土、文化によって人を引き付ける魅力であるソフトパワーが存在するためであろう。何より、人を肯定し、寛容力のある人間主義が基底にあるためであろう。

・広大な海域を有している。

海洋基本計画には、「我が国に富と繁栄をもたらすために、海洋の有する潜在力を最大限引き出すことを目指す。海洋環境の保全との調和を図りながら、我が国周辺海域の水産資源、エネルギー・鉱物資源等の海洋資源の開発等を進めるとともに、これらに関わる水産業や資源関連産業等も含む海洋産業の振興と創出や国際展開を図ることは、将来の我が国の成長による富の創出に大きく寄与する。」とある。

地域の自然とそこに住む人々が、豊かな自然を守りながら、その恵みを受けて幸せに暮していく生業を平等に受けることができる社会を作っていくことがブルーエコノミーであり、その拠点としての沖縄の可能性が高い。

片本恵利氏

沖縄国際大学総合文化学部教授

【プロフィール】

大阪府出身、臨床心理士。

沖縄国際大学総合文化学部人間福祉学科教授

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了認定退学

天理大学非常勤講師、国立療養所宇多野病院、におの浜クリニック、大阪市教育センター、沖縄県スクールカウンセラーを経て沖縄国際大学総合文化学部人間福祉学科に任用され、現在に至る。

琉球古典音楽野村流保存会師範。沖縄タイムス芸術選賞伝統芸能部門グランプリ受賞。

卒業研究で沖縄の伝統宗教職能者を取材し、爾来沖縄と京都を行き来しながらフィールドワークを行う。2000年に沖縄に移住し、沖縄の風土に根ざした心理臨床の可能性を模索している。大学では教職課程専任教員として教員を目指す学生の指導に当たる。

近著 岡田康伸監修「たましいの心理臨床」木立の文庫 他。

【講演要旨】

講演3 「沖縄の風土に根ざした心理臨床の可能性」

一人の人間が一人の人間の生きる過程に寄り添い向き合うのが心理臨床であるとする、どうしても人間とは何か、生きるとは何か、さらに癒しとは何かについて考えざるを得ません。それを科学的に行うならば、人の世の外や死を視野に入れること、近代の医学や心理学の誕生以前の癒しの在りようを知ろうとすることは必然と考えられます。さらに、一人の人間が一人の人間を支えるときよりどころにできるものは何かと考えると、沖縄の風土ならではの在り方が今日の心理臨床のみならず対人支援全般に大きなヒントをもたらすように感じています。

皆様ご承知のとおり沖縄は多くの島々からなりその自然や文化、歴史は一様ではなく、今回の話題にかかわる学問領域も多岐にわたるため発表者の立場で沖縄全体の特徴を網羅的に正しく記述することは到底不可能ですが、当日は、

- ①発表者のスクールカウンセラー体験を通じて見えてきた沖縄の若者たちのこころ
- ②ユタやノロと呼ばれる伝統宗教職能者の共同体での役割についての心理学的考察
- ③沖縄における依存症者への支援と沖縄の伝統文化・風土のかかわりの事例

などの話題に触れながら沖縄のある時ある場所の真実をお届けし、沖縄の自然、文化、歴史を含む風土に根ざした心理臨床の可能性について皆様とご一緒に深めることができれば幸いです。

益 崎 裕 章 氏

琉球大学大学院医学研究科教授

【プロフィール】

1989年（平成元年）京都大学医学部 卒業、1996年 京都大学 医学博士（分子医学専攻）、2000年よりハーバード大学医学部 招聘博士研究員・客員助教授、2008年 京都大学 内分泌代謝内科 講師、2009年（平成21年）より 琉球大学 大学院 医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座（第二内科）教授。琉球大学 副医学部長、副病院長を歴任。現在、国家諮問機関の委員・主な医学会活動として 日本学術振興会 『食と未病マーカー委員会』 学界委員、日本内分泌学会 筆頭理事・日本内分泌学会 英文誌 Endocrine Journal 編集長、日本肥満学会 常務理事、日本心血管内分泌代謝学会 理事、日本神経内分泌学会 理事、日本肥満症予防協会 執行理事、日本糖尿病学会 学術評議員、国際医学誌 Metabolism 副編集長を併任。

【講演要旨】

講演4 「沖縄県の健康長寿復興を見据えた医学研究と社会実装の展開」

人類未曾有の超高齢社会に突入した日本における3大疾病として2型糖尿病、がん、認知症が挙げられます。これらの発症・進展には食事・運動・睡眠・ストレスマネジメント・社会とのつながりなどのライフスタイル変調が関与しています。しかし、健康に良くないライフスタイルを改善し、実効性を伴う行動変容を成功させることは至難です。私達は「身体に良くないと頭で理解出来ていてもヒトはなぜ、過食に陥り運動嫌いになってしまうのか」という脳内分子メカニズムの解明に取り組んでいます。その結果、動物性脂肪の習慣的過剰摂取が視床下部（小胞体ストレス）や脳報酬系（エピゲノム）の機能を攪乱し、自身が必要とする以上のカロリーを摂り過ぎてしまうメカニズムや僅かな体重増加に伴って俄然、身体を動かす意欲が失せてしまう驚くべき仕組みが明らかになりました。ハッキングされた脳の異常はアルコールやタバコ、スマホ、ゲーム・ギャンブルに対する依存や認知機能低下と深く関係することも判明しました。一方、食や運動を賢く選択すれば一旦、ハイジャックされた脳機能を取り戻せる可能性も見えてきました。基礎研究の成果を社会実装に結実させるため、私達は産官学共同研究を積極的に推進し、米油に由来する機能成分の有効性に注目した健康食品をこれまでに3種類、製品化（商品化）することに成功し、発明代表者として国際特許を含む計7件の特許を取得しています。また、AI、IoT、IoB（ヒトとモノをつなぐインターネット）の活用に注目し、離島における実証研究「久米島デジタルヘルスプロジェクト」を展開してきました。デジタルヘルスデバイスやスマホアプリから得られる体重、運動量、食事内容、睡眠の質などの個人データをクラウド化し、AIが機械学習しながら解析し、個人にとって最適と考えられる健康改善アドバイスを繰り返します。被験者ごとに多様な行動特性を持つ中で結果につながる行動変容をAIが機械学習し、試行回数に応じて精度が向上していく仕組みです。本講演では私達が沖縄県の健康長寿復興を見据えて進めてきた脳科学・分子栄養学・行動変容科学研究の一端を御紹介し、人生100年時代を迎えた日本が目指す予防・治療医学の在り方を考えてみたいと思います。

【メ モ】